

## 審査の結果の要旨

氏名 高橋亜希子

本論文は、高等学校における総合学習に焦点を当て、総合学習の一環として卒業論文の執筆を課している高等学校での事例を通して、生徒の視点から学習過程と意義を分析考察したものである。論文は5部11章から構成されている。

第1部第1章では高等学校総合学習の現状に関し、総合的な学習の時間の低迷状況とその背景となる課題を整理し、第2章では戦後を4時期区分に分けて高校総合学習の展開を概括している。続く第3章では、これら先行研究の課題を理論的に整理し、第4章では生徒の学習中の意欲の継時的変化の検討、総合学習の学習様式の特徴の検討、学習過程における他者との相互作用と生徒の内面的変容の関係の検討という検討3課題を導出し、本論文の理論枠組みとして、ヴィゴツキー学派による分析方法について述べている。

第2部第5章では、1年間の継時的変化から生徒の意欲低下の背景に「作業負担」、「受験と学校行事との時期的重なり」要因が関与し、「学習の楽しさ」や「価値」に対するイメージの変化によって、生徒の意欲が分化していく点を明らかにしている。第6章ではこの分化の様相を事例から検討し、総合学習の成立には生徒自身がテーマを意識し展開する過程と研究として仮説を立て資料収集をする過程の時期的一致が必要である点を示している。

第3部第7章では、総合学習の達成要因を教科・総合の学業成績、質問紙調査、4人の面接・観察データによる事例研究から分析し、「生徒の関心の深い領域とテーマとの結びつき」「研究の枠組・計画の明確性」「情報収集や支援・資源へ向かう能動性」「教員からの支援の適切性」の4要因が、達成に関与する固有の要因であることを明らかにしている。

そして第4部8章では、学習課題設定過程での対照事例を検討し、生徒側の *inner referent* の成熟度や確かさ、教師側の *inner referent* への呼応と生徒への言葉の内的説得性が課題設定に関与することを示している。第9章では1名の生徒への継続的面接調査分析から学習成立の背景要因と学習過程で生じた認識上の変化を卒業後まで追跡検討し、第10章では9章と同一生徒事例をヴィゴツキー学派の接触と振動による心的体験の出現と言う分析枠組みから微視分析することで、意味生成過程と存在様式の変化を描出している。

そして第5部11章では、論文を総括し、総合学習の意味と残された課題を論じている。

本論文は、高校総合学習を長期的に追跡分析した実証論文であり、包括的質問紙調査と焦点化観察、選択的事例記述法の組み合わせにより、総合学習がもつ独自の機能を生徒側の経験としての意味生成と青年期自己形成との関連から分析した点で、独自性が高い学術論文であり、探究的な学習過程に対する新たな視座を提示した論文であると評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあるものと判断された。